

(11月 29日)「ヨハネによる福音書 11: 45~57」

これは、カリアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。

(ヨハネによる福音書 11章 51節)

- ・イエス様が墓に葬られて4日も経っていたラザロという人物を生き返らせたというニュースは、瞬く間にユダヤ中に流れたことでしょう。ラザロの姉妹を慰めに来ていた人等から、その出来事は伝えられていったと思われまます。
- ・ラザロと親しい人たちは、イエス様の行為を好意的に捉え、イエス様を信じたことでしょう。ただし奇跡行為者としての側面が強かったかもしれません。一方宗教指導者たちには、「このままでは大変なことになる」という恐れが生じました。
- ・大祭司カリアファは、イエス様ひとりを犠牲にすれば、すべてが丸く収まるのではないかと提案します。宗教指導者たちは、この考えに賛同します。ところがこのことは、彼の考えから出たものではありませんでした。神さまのご計画が、知らないうちに組み込まれていくのです。

(11月 30日)「ヨハネによる福音書 12: 1~11」

彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心に掛けていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていたながら、その中身をごまかしていたからである。

(ヨハネによる福音書 12章 6節)

- ・イエス様がエルサレムに入る直前、ベタニアのマリアは純粋で非常に高価なナルドの香油をイエス様の足に塗り、自分の髪でそれを拭ったそうです。香油の量は1リトラ、約326gですが、その価値は300デナリオン、およそ300万円もしたそうです。
- ・その光景を見て、イスカリオテのユダは言います。「香油を売って、貧しい人々に施せばよいのに」と。確かに正論です。しかしイエス様は彼の言葉よりも、マリアの行為を大切にしました。
- ・教会においても、「正論」をかざして他の人の行為に対する批判がおこなわれることがあります。自分を肯定するために、聖書の言葉が切り取られて語られることもあるでしょう。しかし大切なのは、その行為はイエス様に喜ばれているのかどうかということなのです。

福音書通読

11月



(11月 1日)「ヨハネによる福音書 5 : 31~47」

わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。

(ヨハネによる福音書 5 章 32 節)

- ・わたしたちは何によって、イエス様を信じるのでしょうか。キリスト教の書店に行くと、様々な聖書の解説本が並びます。中には「3日でわかる聖書」のような本も出版されています。
- ・ヨハネ福音書のイエス様の言葉は、正直とても難しいです。この言葉が理解できないと滅ぼされるのであれば、多くの人がつまづくことでしょう。しかし神さまは、ご自分の愛を伝えるためにイエス様を十字架につけるという選択をされました。
- ・わたしたちはたとえ神さまのことを頭で理解できなかつたとしても、神さまから与えられるみ言葉を心に留め、神さまの愛を感じていけばよいのです。イエス様の十字架と復活をいつも思い起こすこと、これがイエス様を受け入れることにつながるのです。

(11月 2日)「ヨハネによる福音書 6 : 1~15」

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」

(ヨハネによる福音書 6 章 9 節)

- ・聖書の四つの福音書にはすべて、「5000人の供食」と呼ばれる物語が載せられています。しかしこのヨハネ福音書には、他の福音書に見られない大きな特徴があります。それは一人の少年の存在です。
- ・聖書では少年となっていますが、おそらく奴隷だったろうと思われます。彼が手にしていたのは大麦パンと魚でした。大麦パンはとても堅いため、家畜のエサとして使われていました。また奴隷の食料でもありました。
- ・少年はその大切な「大麦パン」をイエス様に差し出しました。周りの人はその質と量に、眉をひそめたでしょう。しかしイエス様は、その「貧しい献げ物」を喜ばれ、大きく用いてくださったのです。イエス様の前に、「つまらない物ですが」という謙遜はいらないのです。

(11月 27日)「ヨハネによる福音書 11 : 28~37」

イエスは涙を流された。

(ヨハネによる福音書 11 章 35 節)

- ・マルタがマリアに「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちすると、マリアはすぐに立ち上がり、イエス様の元に向かいます。イエス様が来られたと聞いても動かなかった体が、「自分を呼んでいる」と聞いたときに動いたのです。
- ・彼女もまたイエス様に、「～なら、死ななかつたでしょうに」と訴えます。ここまではマルタと同じ言葉です。しかしその後が続きません。涙があふれて、言葉に詰まってしまったのでしょうか。
- ・イエス様は憤りを覚え、心を騒がせます。そして涙を流されました。この涙は、何の涙なのでしょう。自分が来たのに泣き続けることへの悲しみでしょうか。それとも人間を悲しみに陥れる力に対してのものでしょうか。ただ理由はどうであれ、一緒に泣いてくださるイエス様の姿をいつも心に留めたいと思います。

(11月 28日)「ヨハネによる福音書 11 : 38~44」

こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。

(ヨハネによる福音書 11 章 43 節)

- ・死はどんな人にも訪れます。お金をいくら持っても、贅沢な服で身を固めていたとしても、必ずいつの日か、死はやって来ます。そしてどんな人も、抵抗することはできません。それでも人は、憤ります。
- ・ラザロの死の前に、イエス様も憤られました。しかしその憤りは、単なる嘆きや抵抗ではありませんでした。死をも司る神さまの力を伝えたいという震えでした。神さまの愛は、死の悲しみよりもはるかに大きいことを知らせたいという強い思いでした。
- ・この物語の出来事はラザロの蘇生であり、復活ではありません。なぜならラザロにはもう一度、死が訪れたからです。その“二度目の”死まで、彼がどのように生きたのかは分かりません。しかし彼は、「死んでも生きる」ということを信じ続けたのではないのでしょうか。

(11月 25日)「ヨハネによる福音書 11 : 1~16」

イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」

(ヨハネによる福音書 11 章 4 節)

- ・ベタニアのマリアとマルタはルカ福音書 10 章にも登場します。イエス様はその兄弟ラザロを含む三人を愛しておられました。エルサレムに滞在しているときには、ベタニアの彼らの家を拠点としていたのかもしれませんが。
- ・ヨハネ福音書はベタニアやエルサレムがある地域と、洗礼者ヨハネが洗礼を授けていた場所とをヨルダン川で分けます。地図を見ても、その位置関係はよくわかりません。ただ言えるのは、10 章の終わりにイエス様は、ヨルダン川を渡ってきたばかりだということです。
- ・ラザロが病気だということを知っても二日間、イエス様がその場を動かなかったのは、すぐに行く危険だったということもあるでしょう。しかしその時間を費やすことは、これからおこなわれることが、「神によって」なされることだと伝えるためだったのです。

(11月 26日)「ヨハネによる福音書 11 : 17~27」

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」

(ヨハネによる福音書 11 章 25 節)

- ・イエス様がラザロの元にたどり着いたのは、すでにラザロが墓に葬られてから 4 日後でした。ユダヤでは死後 3 日間は、霊が体のそばにとどまっていると考えられていました。ですからその霊すらも去って行ったということになります。
- ・ベタニアのマリアとマルタの姉妹は、イエス様が来られたと聞いて違う反応を見せます。マリアは家で座っていたままでしたが、マルタは迎えに行きました。ただしそれは、すぐに来てくれなかったイエス様に何か一言、言いたかったからなのかもしれません。
- ・イエス様はマルタに、「わたしは復活であり、命である」と語ります。この言葉は、お葬式などでよく用いられる言葉です。マルタはこの言葉を聞いて、「あなたは神の子、メシア」だとイエス様に伝えました。信仰告白です。マルタはイエス様の言葉を信頼したのです。

(11月 3日)「ヨハネによる福音書 6 : 16~21」

そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。

(ヨハネによる福音書 6 章 17 節)

- ・湖の上を歩くイエス様の話は、マタイおよびマルコ福音書にもあります。しかしそれらの福音書には、強いて弟子たちを舟に乗せるイエス様の姿が描かれていますが、ヨハネにはありません。「イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった」とだけ書かれます。
- ・まるで弟子たちは、イエス様の存在を忘れたまま舟を出してしまったかのようにです。でもその姿は、イエス様のことを忘れ、自分のことだけを考えながら歩んでしまうわたしたちの姿と重なるようにも思えます。
- ・しかしイエス様は、必ず来てくださいます。わたしたちがたとえイエス様から離れて勝手な行動を取ったとしても、荒れた湖の上に静かに歩いて来てくださいます。そしてわたしたちの舟に乗りこまれ、目的の場所まで導いてくださるのです。

(11月 4日)「ヨハネによる福音書 6 : 22~40」

イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

(ヨハネによる福音書 6 章 35 節)

- ・「御利益宗教」という言葉があります。その宗教を信じることで、自分に利益が与えられるという意味ですが、わたしたちの信仰は神さまに対して、ご利益だけを求めてはいないでしょうか。
- ・5000 人の供食を目にした人々は、イエス様を捜します。彼らはイエス様を、自分たちの王にしようと思いました。ユダヤ人という枠組みに入った人だけを、救いに導いてくれる救い主になって欲しかったのです。
- ・しかしイエス様は、目に見えるパンで自分の周りの人だけを救う方ではありませんでした。命のパンとなってすべての人を救うことが、神さまのみ心であり、イエス様の歩む道だったのです。すべての人とは、すべての場所や時代に生きる人々のことです。

(11月 5日)「ヨハネによる福音書 6 : 41~59」

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。

(ヨハネによる福音書 6 章 56 節)

- ・キリスト教がまだ公認されていなかった頃、その礼拝の様子を伝え聞いた人たちは、恐怖を覚えたそうです。「彼らは人の肉を食べ、人の血を飲んでいく。とても恐ろしい儀式をしているようだ」と。
- ・わたしたちも聖餐式の中で、「あなたのために与えられた主イエス・キリストの体」という言葉とともにパンを受け取り、「あなたのために流された主イエス・キリストの血」という言葉とともに杯を手にします。
- ・この「肉」と「血」の解釈はカトリックやプロテスタントで違いがあるものの、「わたしたちを生かす」ために与えられたものであることは確かです。そしてそれは、魔術でも怪しい儀式でもなく、神さまからのお恵みなのです。

(11月 6日)「ヨハネによる福音書 6 : 60~71」

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。

(ヨハネによる福音書 6 章 66 節)

- ・今日の場面の最初に、弟子たちのこのような言葉があります。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」。これを言ったのは「弟子たちの多くの者」と書かれていますが、「こんな話」とは何のことでしょうか。
- ・聖書には、多くの「つまずきの石」が散らばっています。嵐を静めた話、わずかな食べ物で多くの人を満腹させた話、悪霊を追い出した話、病人がいやされた話、死者がよみがえった話。そして何よりもイエス様の降誕と復活は、多くの人にとって「つまずきの石」となるのです。
- ・神さまはあえて、わたしたちの前に「つまずきの石」を置かれます。そしてわたしたちがイエス様に対し、「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」と告白するのを待っておられるのです。

(11月 23日)「ヨハネによる福音書 10 : 7~21」

わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

(ヨハネによる福音書 10 章 11 節)

- ・ユダヤ地方では、羊は珍しい動物ではありません。羊飼いは一般的な職業です。それではもし当時のユダヤの人たちに、「あなたはどんな人が良い羊飼いだと思いますか？」と質問したら、どのような答えが返って来たでしょうか。
- ・「草が多く生えているところや水場に羊たちをうまく導ける人」、「群れの数を上手に増やせる人」、中には「強い群れにするために弱い羊を切り捨てる人」という答えもあったのかもしれませんが。
- ・しかしイエス様は、良い羊飼いは「羊のために命を捨てる人」だと言われます。そしてその目的は、羊が命を豊かに得るためです。その良い羊飼いは、十字架に向かわれたイエス様ご自身です。では羊とはだれのことでしょうか。そう、わたしたちのことです。

(11月 24日)「ヨハネによる福音書 10 : 22~42」

イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。

(ヨハネによる福音書 10 章 25 節)

- ・ヨハネ福音書では 5 章以降、イエス様とファリサイ派などのユダヤ人指導者たちとの論争が続いていました。ついにユダヤ人たちは、「あなたがメシアならはっきりそう言いなさい」とイエス様に詰め寄ります。
- ・イエス様に出会った瞬間、「この人は救い主だ」と受け入れることができる人もいれば、自分の思った答えが得られないと、いつまでも信じる人ができない人もいます。それは今のわたしたちも同じなのかもしれません。
- ・それは、イエス様の声を聞こうとしないから。その声に耳を貸そうとしないから。そういうことなのでしょう。ユダヤ人はその指摘に腹を立て、石を手にしました。その結果、イエス様は彼らのそばから去っていかれました。あなたがそこにいたなら、どうしていましたか。

(11月 21日)「ヨハネによる福音書 9: 35~41」

イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」
(ヨハネによる福音書 9 章 41 節)

- ・昔、日曜日の夜に「知ってるつもり?!」という番組があったのを覚えておられるでしょうか。歴史上の人物を取り上げ、あまり知られていないエピソードを紹介する番組でした。そして 2002 年 3 月に放映された最終回は、「イエス・キリスト」でした。
- ・その番組を見た多くのクリスチャンは、「これは知っている」、「わたしたちには常識だ」と思ったかも知れません。歴史的なことや聖書に書かれていることであれば、知識として知っているからです。
- ・ではイエス様の本質は、見えていますか。生まれつき見えなかった人は、イエス様に会ったときにすぐその本質を見ることができました。しかし「わたしは見える」と思い込んでいる人には、理解できません。結局、「知ってるつもり」で終わってしまうのです。

(11月 22日)「ヨハネによる福音書 10: 1~6」

門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。
(ヨハネによる福音書 10 章 3 節)

- ・聖書には羊飼いと羊の話がよく出てきます。旧約に出てくるダビデは羊飼いでしたし、イエス様の誕生を真っ先に知らされたのも羊飼いでした。また「見失った羊のたとえ」という話も収められています。
- ・羊という動物は、外敵に対して非常に弱いそうです。移動するのも遅いし、臆病で目もよく見えないそうです。しかも野獣や強盗などの外敵が多く、囲いの中で休み、羊飼いに導いてもらわないとすぐに殺されてしまうのです。
- ・だから、自分の弱さを知っている羊は、自分の羊飼いの声を聞き分けるのです。自分の力で歩くことができないことを、分かっているからです。わたしたちはどうでしょう。自分の弱さに気づいているのでしょうか。自分の羊飼いの声に耳を傾けていますか。

(11月 7日)「ヨハネによる福音書 7: 1~9」

公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。
(ヨハネによる福音書 7 章 4 節)

- ・ヨハネ福音書の舞台は、ガリラヤからエルサレムへと移っていきます。そこにはイエス様の兄弟たちもいました。彼らはイエス様に対し、「人々の前で自分を世に現したらどうだ」と言います。
- ・ガリラヤでのイエス様の言動を目の当たりにしてきた彼らは、エルサレムというユダヤの中心地で不思議な業をおこなった方が、何かをおこなうのに手っ取り早いのではないかと進言したのでしょうか。しかしそもそも彼らは、イエス様を信じてはいませんでした。
- ・兄弟たちはイエス様のそばにいつもいたので、イエス様のことを何でも知っていると思っていたのでしょうか。しかし一番肝心なところの理解が、できていなかったのです。「世間が認めれば、認めてやってもいい」という思いもあったのかもしれませんが。

(11月 8日)「ヨハネによる福音書 7: 10~24」

うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。
(ヨハネによる福音書 7 章 24 節)

- ・イエス様は兄弟たちに「わたしはこの祭りには上っていかない」と言われていましたが、ひそかにエルサレムに上って行かれました。そして祭りの中盤になると、神殿の境内で教え始められました。
- ・イエス様に対して否定的な考えを持っている人たちは、イエス様を様々な理由で裁こうとします。しかしイエス様はその行為を、「うわべ」の行為だと批判し、正しい裁きをするようにと命じます。
- ・本質を見ずに、うわべだけで人を批判すること。わたしたちもそのようなことをしてしまうことはないでしょうか。規則や原則、建前だけを大事にして、本当に大切なことから目をそむけてしまう。そうならないように、気をつけましょう。

(11月 9日)「ヨハネによる福音書7:25~31」

人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。

(ヨハネによる福音書7章30節)

- ・ガリラヤからイエス様を見て来た人たちは、彼の出身地がナザレという小さな村であり、彼の父親は大工であったことを知っていました。メシアはどこから来るのか分らないと信じられていたので、イエス様はメシアではないと人々は考えたようです。
- ・しかしイエス様は、自分は神さまの元からやって来たと言います。そして自分は神さまを知っているとも言います。このことを多くのユダヤ人は、神さまに対する冒瀆だと考えました。
- ・しかし群衆の中には、イエス様を信じる人も大勢出てきます。イエス様の言動によって、分裂が起こっていくのです。わたしたちにとってもイエス様を信じ従うことは、様々な軋轢や対立を伴うことなのかもしれません。

(11月 10日)「ヨハネによる福音書7:32~39」

わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。

(ヨハネによる福音書7章38節)

- ・イエス様は「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」という言葉を、祭りが最も盛大に祝われる終わりの日(新しい翻訳では「祭りの終わりの大事な日」)に大声で言われます。この言葉は4章のサマリアの女性との会話を思い起こさせます。
- ・38節には「聖書に書いてあるとおり」とありますが、イザヤ書58章11節には「主は常にあなたを導き、焼けつく地であなたの渇きをいやし、骨に力を与えてくださる。あなたは潤された園、水の涸れない泉となる」とあります。
- ・またエゼキエル書47章には命の水が神殿の聖所からあふれ出てくるといふ幻が描かれます。イエス様はその栄光(十字架)によって、わたしたちが渇くことのないように、命の水である霊(聖霊)を与えて下さるのです。

(11月 19日)「ヨハネによる福音書9:1~12」

弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

(ヨハネによる福音書9章2節)

- ・この弟子たちの質問が本人に聞かれていたとしたら、目の見えない人はどう感じたでしょうか。弟子たちは、まるで「他人ごと」のようにイエス様に質問をなげかけます。そしてその質問は、「因果応報」という考えに基づいたものでした。
- ・当時ユダヤでは、財産・長寿・子孫を得ることは、神さまからの祝福であり、その逆は神さまの罰であると考えられていました。しかしイエス様は、はっきりとその考えを否定したのです。「誰が罪を犯したのでもなく、神さまの業がこの人に現れるためなのだ」と。
- ・わたしたちの周りにはある宗教の中には、先祖の霊を鎮めるため、神の怒りを抑えるため、罪を清めるためなど、様々な理由をつけて献金を集め、財産を奪い取ろうとするものもあります。しかしわたしたちの「弱さ」は、神さまの栄光を現すためのものなのです。

(11月 20日)「ヨハネによる福音書9:13~34」

彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」

(ヨハネによる福音書9章25節)

- ・昨日の箇所で見えるようになった人が、今日はファリサイ派の人々からの事情聴取を受けます。最初は目が見えるようになった本人、次にその人の両親、そしてもう一度本人が呼び出され、質問をされます。
- ・両親は目が見えるようになった人は自分の息子だと答えますが、どうやって見えるようになったのか、誰がそうしたのは「分からない」「本人に聞いてくれ」と明確な答えを避けました。それは会堂から追放されるのを避けるためでした。
- ・しかし本人は「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」と、イエス様がメシアであることを証言します。その結果、彼は外に追い出されてしまいました。わたしたちがこの場にいたら、どのような行動をするのでしょうか。

(11月17日)「ヨハネによる福音書8:39~47」

わたしの言っていることが、なぜ分からないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。
(ヨハネによる福音書8章43節)

- ・唐突に、アブラハムという名前が出てきます。アブラハムは創世記12~25章に登場する人物で、「信仰の父」と呼ばれます。彼は神さまによってアブラハムと改名される前は、アブラムと呼ばれていました。
- ・彼は神さまから、「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい」と命じられます。何のしるしも保険もない中で、新しい土地に家族を連れて行くのはとても大変なことです。しかし彼は、「主の言葉に従って旅立った」(創世記12:4)のです。
- ・これが「アブラハムの信仰」です。ただ神さまの言葉のみを信じ、その言葉に従ったのです。ところが「アブラハムの子」を自認する彼らは、神さまから示された「真理」であるイエス様を否定するのです。

(11月18日)「ヨハネによる福音書8:48~59」

イエスは言われた。「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」
(ヨハネによる福音書8章58節)

- ・「はっきり言うておく」と訳されている言葉は、原文通りだと「アーメン、アーメン、わたしはあなたがたに言う」となります。今からとても大切なことを言うよ、という合図です。続けて、イエス様は「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」と言われます。
- ・ヨハネ福音書は「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった」という言葉で始まります。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」とある通り、言とはイエス様のことでしょう。
- ・ですから、アブラハムよりも前に「ある」と言われたイエス様の言葉は理解できます。しかしユダヤ人にとっては、この言葉は神さまに対する冒瀆以外の何物でもありませんでした。そしてついにユダヤ人たちは、イエス様に投げつけるために石を手にするのです。

(11月11日)「ヨハネによる福音書7:40~44」

こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。
(ヨハネによる福音書7章43節)

- ・イエス様の言動は、ユダヤの人たちに戸惑いと対立を引き起こしていきました。「メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか」という言葉は、わたしたちにも疑問を抱かせます。
- ・というのもわたしたちは、イエス様がユダヤのベツレヘムで生まれたと、マタイ・ルカ福音書を通じて聞いているからです。イエス様がベツレヘムで生まれたという伝承は、広く伝わっていなかったということでしょうか。
- ・いずれにせよ、自分の知識だけを頼りに物事を判断するときに、人々の間に対立が生じるということを、わたしたちも心に留めておかなければならないと思います。神さまの前に、「絶対」ということはありえないのですから。

(11月12日)「ヨハネによる福音書7:45~53」

我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたいとならなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。
(ヨハネによる福音書7章51節)

- ・ヨハネ福音書3章でイエス様と議論を交わしたニコデモが、再び登場します。彼はファリサイ派の一人で、ユダヤ人たちの指導者でした。彼は「我々の律法によれば」と、祭司長やファリサイ派の人々のやり方を理路整然と批判します。
- ・祭司長やファリサイ派というユダヤ人指導者たちは、群衆がイエス様のことを信じるのは、律法を知らないからだ決めつけていました。律法を知っている議員やファリサイ派は、イエス様の考えを受け入れるはずがないと思っていました。
- ・しかし仲間の指導者の一人であるニコデモが、「律法によれば」という指摘をしてきたのです。しかしそれでも、彼らの目は遮られたままでした。自分が信じ続けてきたものを否定することは、それほど難しいことなのです。

(11月13日)「ヨハネによる福音書8:1~11」

しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。
「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。」
(ヨハネによる福音書8章7節)

・律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女性をイエス様の元に連れてきます。彼らはイエス様に、この女性の罪をどう扱うか尋ねます。「赦せ」と言えば律法を無視したことになり、「殺せ」と言えば民衆の心は離れていくでしょう。

・彼らの訴えを聞いたイエス様は、かがみ込んで指で地面に何か書かれました。一体何を書いておられたのでしょうか。そして長い沈黙のあと、イエス様が言った言葉は、「罪のない者がまず石を投げなさい」というものでした。

・わたしたちは教会や政治、社会のことなどを声高に批判することがあります。でもそのときに、自分のことをきちんと見つめ直すようにしましょう。自分こそが「正義」だと思いつめ直すことは、自分の罪と向き合えていないことと等しいとも言えるのです。

(11月14日)「ヨハネによる福音書8:12~20」

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」
(ヨハネによる福音書8章12節)

・ヨハネ福音書1章4~5節には、このように書かれています。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」。

・そして今日の箇所では、その光とはご自分のことであるとイエス様は証しされました。暗闇の中でどこに向かって歩いているかわからないわたしたちのために、イエス様という世を照らす光が来てくださったのです。

・今年は11月27日に降臨節を迎えます。わたしたちを照らし、命に導くために、神さまはその独り子をお与えくださいます。神さまからのそのような大きな愛を感じる日が、クリスマスなのです。

(11月15日)「ヨハネによる福音書8:21~30」

「だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」
(ヨハネによる福音書8章24節)

・「わたしはある」という言葉を聞くと、出エジプト記の中でモーセが神の名を尋ねたときに言われた「わたしはある。わたしはあるという者だ(出エジプト記3章14節)」という箇所を思い出す方もおられるでしょう。

・新しい聖書(聖書協会共同訳)では、出エジプト記3章14節が「私はい、という者である」という訳に変わりましたが、神さまもイエス様も「存在し続ける」ということが大切なことなのではないでしょうか。

・そして「共にいてくださる」イエス様は、その十字架によってわたしたちを独りにはしないと約束してくださいます。「わたしはいつもあなたがたのそばにある(いる)」と、宣言してくださるのです。

(11月16日)「ヨハネによる福音書8:31~38」

あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。

(ヨハネによる福音書8章32節)

・真理とは何でしょうか。イエス様を十字架につけたポンティオ・ピラトはイエス様への尋問のときに、「真理とは何か」と最後に言います。真理とは決して変わることはない正しいことを指します。

・イエス様の「わたしは道であり、真理であり、命である(ヨハネ14章6節)」という言葉の思い出す人も多いでしょう。イエス様は「真理」として、この世に来られました。そしてわたしたちを自由にしてくださるのです。

・わたしたちは、罪に束縛されています。毎日正しく生きようと思っても、悪い思いが次から次へと浮かび、人を傷つけ、神さまに背いてしまいます。その罪の鎖からわたしたちが解放され、罪から自由になることを、イエス様は望まれているのです。